

# 日本の紫色について

## ——紫の彩色材料とその変遷——

國 本 学 史

基礎教育課程非常勤講師

Purple Colors in Japan: Purple Coloring Materials and Their Changes

KUNIMOTO Norifumi

*Division of Liberal Arts and Science*

(Received November 5, 2010 ; Accepted January 13, 2011)

### Abstract

This article explores the changes that occurred in the purple coloring materials used in Japan over the course of history up through the pre-modern era, particularly those changes that occurred in the ancient period. Knowledge and information about the color concepts and color materials imported to Japan were codified around the 8th century and their production and usage systems organized. During this process the color purple was regulated as a color solely for the use of high-ranking individuals, and thus purple came to be considered an important color. Gradually, the decorative method used in paintings and decoration known as *kontanryokushi*, literally “navy blue, red, green, purple,” was regulated, and purple became one of the essential colors in painting materials. However, purple was originally made from the plant *Lithospermum erythrorhizon*, known as *murasaki* in Japanese. Eventually coloring materials such as *suô* (*Caesalpinia sappan*) came to be used in place of *murasaki*, and the image of the color itself changed as black was used in place of purple. Thus various changes occurred in the environment surrounding purple colors and the pigment or materials used to create a particular instance of purple usage cannot be simply posited.

Keywords: coloring material, coloring names, purple colors, *murasaki*

### 1. はじめに

紫色は日本の歴史上、長期にわたり貴重な色として重要視されているが、歴史的な変遷・展開を追った考察は進展していない。紫色を呈する彩色材料は非常に劣化・退色し易く、染料系の材料よりも比較的長く色相を保持できる鉱物系天然顔料系による紫色の彩色材料が少ない

こともあり、絵画・彫刻・建築に残存する姿として紫色を明確に確認し難い。特に鮮やかな、明るい紫色を呈する単一の鉱物系天然顔料系彩色材料自体がない。また、染料の紫も貴重で高価な材料であり、民間に流通して広く使用されるようなごく一般的な材料ではなかった。

だが紫色の顔料は日本古代の彩色上、重要な色であり、絵画・工芸・彫刻・建築など様々なものに対する彩色にあたって多々施されている。現在では退色していることが多いながら、紫の残存については多く指摘され、彩色における重要な一要素であったことは否定できない。紫色の染料も同様で、紫色の服色に関する記録や規定が史料等に多く残る。

よって、彩色・染色に欠かせない、重要な紫色が日本で成立・展開して行く過程についてあらためて考察する必要がある。日本で彩色材料に対する理解と基本的な知識が一通り整理された、八世紀頃より紫色が重要な色としての認識は大きくなり、服色や彩色の一要素として平安時代以降も伝えられて行った。様々な色の中の一色として、紫色が果たした役割は大きかったと言える。

本論は、紫色が広く使用・認識されるようになっていった八世紀頃からの文献資料を参照しつつ、顔料・染料ともに彩色の材料としての紫色に注目した視点から、日本の紫色を巡る問題について述べる。それにより、近代以前の日本で紫色の彩色材料が成立した背景と状況について注目し、日本の歴史上紫がどのような変遷を辿ったのかについて整理するものである。

### 2. 紫の材料

紫色を呈する材料は染料系の材料が中心であり、染色において多く用いられている色である。特に最も著名であり、多く用いられたのは紫草による紫色であった。文献上では八世紀までに成立したと考えられる『万葉集』

に、紫色を染める原料となる、紫草について早くも記述がある。万葉集には、

卷十の一八二五

紫之根延横野之春之庭 君乎懸管 鶯名雲

(紫草の根延ふ横野の春野には君を懸けつつ鶯鳴くも)

卷十二の三一〇一

紫者 灰指物曾 海石榴市之 八十街尔 相兒哉誰

(紫は灰さすものぞ海石榴市の八十の街に逢へる子や誰れ)

という歌が見られる<sup>1)</sup>。前者の歌は、紫色を染める原料として紫草の根を用いて染色する、という材料的な知識が伺える内容である。後者の歌は、より具体的に紫の染色工程について言及していると言える。紫草を使う染色に際して椿の灰を媒染剤に用いる、という具体的な技術面について歌に詠まれる程、八世紀当時までに、既に知識や技術が広がっていたことを推測させる内容である。

この他にも、『風土記』中に紫草の記述が度々見られる<sup>2)</sup>。『風土記』『出雲國風土記』飯石郡に「城垣野、郡家正西一十二里[有紫草]」あるいは仁多郡に「志努坂野、郡家西南卅一里[有紫草少]」と紫草についての記述が見られる。この紫草は自生・栽培どちらによるものか明記されていないが、当時の国内における紫草生息を伝える内容で、紫草が認識されていたことが分かる。

また正倉院文書の天平九年(737)記事に「豊後国正税帳」の記述があるが、その中に「紫草園」という記述が登場している。これは国家の事業の一つとしても、栽培事業が行われていたことを確認できる記述である<sup>3)</sup>。租税の物品納入品として、あるいは献上品として紫草は扱われていた品物であったと言える。

紫草による紫の染色にあたっては、十世紀に編纂された『延喜式』などに伝えられる記述に従えば、媒染剤として灰汁を用いることが記録されている<sup>4)</sup>。

『延喜式』卷第十四 縫殿寮 雑染用度

深紫綾一疋。紫草三十斤。酢二升。灰二石。薪三百六十斤。

浅紫綾一疋。紫草五斤。酢二升。灰五斗。薪六十斤。

深減紫綾一疋。紫草八斤。酢一升。灰一石。薪百廿斤。

<後略>

媒染剤に椿の灰を用いる、と染色方法について万葉集の歌で既に具体的に言及があることは前述した通りであるが、延喜式では一歩進んで、上記のように紫色を染め出すための適切な技術・分量・材料の知識が、明確に文

字資料として記録され、残されるようになった。

紫草によらない他の紫色材料は、貝紫による紫がある。貝紫は、古代ローマ時代以降、西欧世界では比較的著名な紫色の材料として使用されたものであり、貴重な材料であったとされる<sup>5)</sup>。ただし、日本で彩色材料についての知識がほぼ整理され、その後の歴史上においても基本となるような材料が一通り出揃った八世紀前後において、貝紫による染色の事実・痕跡は顕著に確認されておらず、当時の遺物の出土や文献上の記載で貝紫について記したものは見当たらない。近現代の事例で、海女業に従事する女性たちが呪術的な文様を衣服に描くに際して使用される<sup>6)</sup>という稀な例を除いては、二～三世紀の遺跡である吉野ヶ里遺跡などから貝紫による紫色が発見されたという報告以外、絵画・彫刻・建築の装飾、及び一般的な染色の材料として貝紫が用いられた痕跡はない<sup>7)</sup>。

また他の紫色染料の材料として、日本に自生しないマメ科の植物である蘇芳が輸入され、蘇芳による紫色染色も盛んに行われるようになる。輸入され始めた当初、蘇芳は日本で自生していない稀少な輸入材料であった。ただ紫草も、紫草園で栽培されていたとしても主として税用の産物や献上品という性格のものが多く、栽培と輸送の手間がかかる以上、高価な材料であることは同様である。そのためか紫草の調達は容易ではなかったのか、蘇芳も紫色の材として使用されるようになる。蘇芳が輸入され始めた八世紀当時には、紫草に比べて非常に安価であったとは考えがたいが、より後代の室町・江戸期等近世になると、紫草の代わりに蘇芳が盛んに使用されるようになる。依然として紫草が高価で貴重であった一方、蘇芳の輸入量の増加に伴って蘇芳の価格が下がり、代用の紫として好んで用いられたからであろう。

他に、顔料的な使い方をされる紫色材料としては、紫土と紫鉾がある。紫土は、ベンガラによるものと、染料系の紫色と顔料系の白色材を混ぜたものがあり、特定の材料を指すものかどうかははっきりしない。当時のベンガラは赤土を原料とする鉾物顔料で、これによる紫土は、染料の紫に比べると発色が暗く、褐色めいた暗めの赤紫色である。

紫鉾はラックカイガラムシの殻をすりつぶして抽出し、綿などに色成分をしみこませて保存したものである。絵の具として使用するには、水に浸して色を絞り出して用いる。原材料の虫は日本に自生する昆虫生物ではなく、基本的に輸入材料である。この材料は、綿に染み込ませた形で保存されたが、それを「エンジ」とも呼び、正倉院文書中では「烟子」あるいは「烟紫」と記されているものが充当する。本来、正倉院宝物に薬剤として記載され、保管されているものは紫鉾と呼んでいたが、絵の具

としては烟子・烟紫として史料に記されることが多い。発色としては、紫よりも赤みがちの色合いと言える。後代に輸入されたコチニールカイガラムシを原料とするものも、「しこう」と呼んだ。色合いは、褐色がかった赤色から明るい赤色にかけての色合いであり、ラックによる色とは異なる色である。

### 3. 服色と紫

紫色を呈する材料は紫草にせよ貝紫にせよ、基本的に希少で高価であったためか、洋の東西を問わず、紫色は高位の人物たちが身につける服色として考えられたようである。日本を含む東アジアの文化圏においても、紫色は高位の服色とされることが多い。八世紀頃、中国大陸あるいは朝鮮半島との交易で、当該の地域より進んだ文物が将来されたことにより、日本国内において律令制度などに定められる服色規定も、大陸に倣った制度として成立して行った。

『唐書』巻二十四 志十四 車服志に、「文武官騎馬服之……三品以上紫五品以上緋七品以上緑九品以上碧……」とあり、当時の唐制における位階に応じた服色の順番は、紫・赤・緑・青の順になっている。また、『宋史』巻百五十三 輿服志百六には、「公服凡朝服謂之具服公服從省今謂之常服宋因唐制三品以上服紫五品以上服朱七品以上服緑九品以上服青……」とある<sup>8)</sup>。唐制と同じく、位階に応じて紫・赤・緑・青の服色順となっている。日本の衣服令における服色の規定は、この順番を取り入れたものと言える。

服制を取り入れた日本でも紫色の原料は稀少な材であったのは前節で述べた通りで、それも手伝って日本国内の服制規定でも、紫色が高位の位階の色として成立したと考えられる。紫を高位とする具体的な規定自体は、大化三（647）年の制によるものであり、織・繡の冠位では深紫色を、紫の冠位では浅紫色を服色に用いる、と定められている<sup>9)</sup>。

是歳。制七色一十三階之冠。一曰。織冠。有大小二階。以織為之。以繡裁冠之縁。服色並用深紫。二曰。繡冠。有大小二階。以繡為之。其冠之縁。服色、並同織冠。三曰。紫冠。有大小二階。以紫為之。以織裁冠之縁。服色用浅紫

この記述が、いわゆる冠位十二階の制における服色規定推定の根拠とされる。位階に応じて服色を規定したのは、日本の歴史上、文献に明記された例として初めてのものである。その後も高位の服色に紫色を用いる服制は継続され、『日本書紀』天武天皇十四（685）年における

「正位深紫。直位浅紫」、持統天皇四（690）年の「其朝服者。浄大壺已下、広式已上黒紫。浄大參已下、広肆已上赤紫。正八級赤紫。」からも、紫色と高位との関わりが見られる<sup>10)</sup>。天武天皇十四年の規定では、深・浅の紫は高位であるが、深・浅蒲萄が緑色の下に配置される。蒲萄は『延喜式』（後註12）縫殿寮によれば、紫草と酢と灰汁で染めることから、赤みのある紫色であると推定される。一方で持統天皇四年の服色規定では、黒紫からはじまって赤紫を経る順番で、以下は唐制的な服色規定に準じるものとなっている。

奈良時代の律令を伝える『令集解』『令義解』などに残される記述から、いわゆる「衣服令」によって高位の服色として紫色が明確に定められるようになったのは、おおよそ八世紀頃からであると言える。特に衣服令の位階ごとの服色はかなり細かく、厳密に区別されており、一品親王・一位諸王・一位諸臣は深紫、二位以下五位以上の諸王・三位以上の諸臣は浅紫と、濃淡による位階色の差異も明記されていた程である<sup>11)</sup>。

#### 『令義解』巻第廿九 衣服令第十九

親王ノ礼服

一品ハ。礼服ノ冠。……

深キ紫ノ衣。牙ノ笏。白キ袴。條帶。……深キ緑ノ紗ノ褶。錦ノ襪。……烏皮ノ舄。……

諸王ノ礼服……

一位ハ。礼服ノ冠。……

深キ紫ノ衣。牙ノ笏。白キ袴。條帶。深キ緑ノ紗ノ褶。錦ノ襪。烏皮ノ舄。二位以下五位以上ハ。並浅キ紫ノ衣。以外ハ皆同シ一位ノ服ニ。……

諸臣ノ礼服

一位ハ。礼服ノ冠。深キ紫ノ衣。牙ノ笏。白ノ袴。條ノ帶。深キ縹ノ紗ノ褶。錦ノ襪。烏皮ノ舄。三位以上ハ。浅キ紫ノ衣。四位ハ。深キ緋ノ衣。五位ハ浅キ緋ノ衣。以外ハ並シ同一位ノ服ニ。……

六位ハ。深キ緑ノ衣。七位ハ。浅キ緑ノ衣。八位ハ。

深縹ノ衣。初位ハ。浅キ縹ノ衣。……

<後略>

#### 『令集解』 巻六 衣服令第十九

親王禮服……

一品。……禮服冠。……

深紫衣。牙笏。白袴。條帶……

諸王……禮服……

一位。……禮服冠……

深紫衣。牙笏。白袴。條帶。深緑紗褶。錦襪。烏皮舄。

二位以下五位以上。並浅紫衣。以外皆同一位服。……



## 諸臣禮服

一位。禮服冠。深紫衣。牙笏。白袴。條帶。深縹紗褶。錦襪。烏皮舄。三位以上。浅紫衣。四位。深緋衣。五位浅緋衣。以外並同一位服。

## 朝服

一品以下五位以上。並皂羅頭巾。衣色同礼服。牙笏。白袴。……  
六位。朱云。凡六位以下。无礼服者也。深緑衣。七位。浅緑衣。八位。深縹衣。初位。浅縹衣。  
<後略>

こうした文献上の記載内容から、紫は単一色相ではなく、深（こ）き・浅（あさ）き、という表現で別の色として区別されていたことが分かる。この濃淡の染め分けは、布あるいは糸の染色の際に用いる紫草の量を調節して区別したのであり、延喜式には濃淡に応じた材料の分量が記載されているので、別個の紫色として紫を染め分けていた当時の基準について確認できる<sup>12)</sup>。

このように、服色に用いられた当時の紫色は、非常に幅広い色相を有しており、多数の紫が認識されていた。特定の元材料について直接言及するものではないが、染料などと併せて正倉院文書中に残る紫の記述は多い。散見される呼称としては、紫草・紫紺・滅紫・依毘・蘇芳・紫土の記述が残されている。このうち、染料の紫草による紫は、紫草が文字通りの材料色名であり、紫紺は音が通じる紫根つまり紫草の根であり、染色で根を使用することからも同義であると推定される。また、滅紫（めっし、けしむらさき）は、『延喜式』縫殿寮の記述によれば、紫草を酢と灰汁で媒染して染める色である。滅紫にも濃淡の区別があり、深滅紫・中滅紫・浅滅紫の色相が存在する。依毘は蒲萄の同音異字で、やはり紫草と酢と灰汁によって染めるものであることは、延喜式の記載から分かる。『衣服令』を記した、『令義解』『令集解』には、蒲萄は紫の最も浅い色である、という記載があることから、これも紫草による染色である。

蘇芳は前節で述べた蘇芳木による材料色名であり、紫土ベンガラや、白系顔料に紫色の染料を付加したものなどによる赤褐色系の紫色である。ただ、紫草と同じく天然の植物染料を用いた染色であり、鉱物性の顔料に比べれば、色相の保持性や材料の堅牢性は劣る。

位階と服色についての規定は、その後制度の改定に応じて多少変化しつつも、基本的には大きく変化しなかった。ただ、紫色の色調は、深紫色から黒色へと大きな変容が起こっている。

『歴世服飾考』（故実叢書）、深紫の項において「延喜式縫殿式」として、

シカルニ此法後ニハ混雜シテ五倍子鐵漿ニテ染ル事ニナレリ

とある。延喜式には当該の記述はないので、この後ろに項目がある装束色彙などの記述を参考に行っているものと考えられる。

その『装束色彙』には、

桃華葉葉曰袍フシ金ニテ染ム濃紫ノ由也但フシ金ハ臭クテ早ク朽ルニ依テ近比故実ノ女工アリテ下ヲ蘇芳ノ木ヲ能煎ジテ夫ニテ染テ上ヲ藤ノ枝若ハ葉ヲ煎ジテ染ルガ色モ美クシク臭クモ無ト云リ藤ノ木無レハ柘榴……三内秘記ニ曰袍四位以上ハ紫フシカネ染也云々装束道具抄曰袍下ヲ赤ク染メ上ニ黒ミヲカケテフカ紫ニ染ラレ候サレドモ今四位ヨリ上ハ大方黒茶ニ染ラレ候黒キトテモ染様替ル事ニ候今ハ大方皆黒茶ニ染申候故少シ違モ候歟云々如此ノ世ニ因テ替リアリ皆縫殿式ノ染ヤウニ轉セル者アリ

とあり、お歯黒の原料として使われた五倍子・鉄漿で混ぜ染めたものや、あるいは黒紫のほとんど黒だけの色をもって、深紫の位階に当てはめるように変化したことが記される。

文明十二年（1480）に成立した、一条兼良による『桃華葉』には、濃紫として

ふしかねにてそむ、濃紫のよし也、ただし附子かねは臭くてはやくくつるによりて、近頃故實の女工ありて、下を蘇芳の木をよく煎して、<後略>

とある。

また、『装束職文図絵』（故実叢書二十四）中、享和元年（1801）松岡辰方によると、

正暦ノ頃ヨリ四位以上皆橡ト称シテ五倍子染ヲ用ルナリ五位皆深緋ヲ用ヒテ浅緋ナカリシガ近年御再興アリ緑ハ六位以下皆縹ヲ用ユ六位ノ蔵人ハ必深縹ヲ用ユルナリ

と記述がある<sup>13)</sup>。

これらの文献上の記述から、紫（深・濃）は、本来紫色の位階服色が濃い黒の色調を持った色へと変化したこと、また、高位の紫色が黒袍をもって代用されるようになったことが分かる。ただ、材料が変化しても基本的に服色の順番は大きく変わらないものとして続き、紫色あるいは紫色に充当するとされた色は、高位の服色として

は変わらなかったのである。

#### 4. 紫の彩色

染色において、稀少なあるいは高位の色として規定されていた紫が、美術・工芸品に施されるものとしてはどのように使用されたのか確認したい。紫色が盛んに使用されていた時代、八世紀の美術・工芸品に彩色が残る例としては、東大寺法華堂の執金剛神像や乾漆四天王像などの塑像・乾漆像の装飾、あるいは東大寺戒壇堂の四天王像の装飾に紫色が残されている。これらの像に施された紫色は、染料による鮮やかな明るい紫色というよりは、暗褐色の色合いを持つ色でベンガラなどを用いていることが多い。同時期建立したと伝えられる栄山寺八角堂の装飾には、ベンガラと藍銅鉍石から作る鉍物顔料の群青の混色による紫色が施されていることが報告されている。他には、薬師寺の麻布に描かれた吉祥天女像に、群青を更に細かくした薄青色の顔料である白群と臘脂（ここでは前出『正倉院文書』中で「烟子」あるいは「烟紫」と呼ばれるもの、紅花原料の染料と考えられる）の混色によって紫色を施している。このように、紫色を呈するような複合材料が用いられた<sup>14)</sup>。

他に、明確な紫色の彩色材料の施された美術・工芸品の遺物や、直接紫の彩色について言及する史料は少ない。ただ、上記の例のような、八世紀頃の彩色が残る例で見られる特徴は、暈縹彩色によってグラデーションの彩色を施す技法であり、暈縹で装飾文様を描く際には、多数の濃淡・明暗の色相を必要としていた。特に内側から外側に行くに従って色を濃くして行く暈縹彩色の手法では、複数の色相によって色を表さなければならない。段階的な色相の濃淡描き分けには複数の色が欠かせなかった。また、赤・青・緑、そして紫の暈縹が系統的に彩色されていることが多い彩色方法であった。紫色は暈縹彩色を構成する色として、彩色装飾に不可欠な色であったと言える。しかし、必要な色でありながらも、紫草による彩色材料は、稀少であり退色し易いし、染料としてではなく顔料のように絵の具として随意に着彩できるものではない。紫色を配することは、彩色における難しい課題であったと言える。

それにも関わらず、紫色は確かに彩色の一要素として施されていた。例えば正倉院宝物である漆金薄絵盤（香印座）の装飾には、紫色の暈縹彩色が残され、当時の彩色として確かに紫色が存在していることを示している。紫色の材料については、現状では不明であるが、ベンガラを用いた紫土あるいは、臘脂と白群を用いた紫色の彩色材料が使用されていると考えられる。

単一の鉍物性顔料などで紫を表せる材料は基本的にベ

ンガラしかないが、ベンガラ一色では鮮やかな紫色を呈することができず、暈縹などの彩色に当たっては染料系の追加使用が想定される。しかし、染料系の紫色は、布や糸のような繊維を染色した際にも退色し易い色であり、絵の具として染料を固めてレーキ顔料のように施す、あるいは染料を顔料の上に施すような場合は、なおさら退色・変色が避けられない。

また、科学・光学的な調査等によれば、正倉院宝物の中でベンガラを用いて彩色している宝物は少ない<sup>15)</sup>。これは先述した通り、ベンガラだけでは赤系・青系両方の暈縹彩色に使用される紫色の表現には対応できなかったからであると考えられる。ベンガラは染料の紫に比べれば変色し難いが、赤色から暗褐色にかけての色相であり、青色がかった鮮やかな紫色を呈することはできない。そのため、ベンガラだけでなく、退色を前提としてでも染料系の紫色を使用せざるを得なかったと想定される。

こうした八世紀、奈良時代の暈縹彩色の技法を受け継ぎつつ、平安時代の文様装飾・彩色法には、新しい法則が用いられるようになっていった。それは、鎌倉時代に編纂された史料、『二中歴』に記載されている、紺丹緑紫の法則である。紺丹緑紫の配色は、色名で表される紺色と赤色、緑色と紫色を並置するという彩色法則を指している。『二中歴』中には、

#### 絵像丹

踊伝 紺丹 緑紫 上朱下丹

説云紺丹緑紫者紺青之傍用丹色又緑青之傍用紫色  
等為佳[餘色准之]〈後略〉

とあり<sup>16)</sup>、図2でも示したように、青系色の隣に赤系色、緑系色の隣に紫系色を配置する、というような一種の配色法則と言える。平等院鳳凰堂本尊阿弥陀如来胎内より発見された大小呪月輪などに見られる配色や、平等院堂内の装飾などに散見されるもので、基本的な色の配置方法は上記の記述に則るものである<sup>17)</sup>。

紺丹緑紫を構成する材料としては、紺色は基本的に青色なので、顔料の群青を用いることがほとんどである。群青は粒子の大小によって濃淡別の青色として作ることができる。丹色は赤色であり、顔料の朱や鉛丹を用いることが多い。緑は藍銅鉍原料の顔料である緑青を用いていることが多いが、緑青は群青と同じく粒子の大小によって濃淡別の緑色を出せる。対して、紫はベンガラによる紫であると、先述したように鮮やかな色相の紫は難しいことから、他材のように顔料系単一の材料で紫を施したことは多くないと考えられる。例えば服色にもある減紫色という紫色は、『画像要集』に「減紫[白青 烟紫



銅黄 件三種ヲ合テ……]」と混色の様子が記されている<sup>18)</sup>。平安期の紫色は、上記減紫のような染料と顔料の合成絵の具が用いられていたこと指摘できる。

しかし、染料の紫を用いる場合、紫の色は非常に退色し易く、また原料も手軽に手に入るものではないために、彩色を施すにあたって材料を調達したり、また退色に伴って塗り直したりするに当たり、他色と同じように彩色できたとは考えにくい。

実際、昭和期に平等院の彩色復元が試みられた際に、当時の現状の色確認に伴う彩色復元模写が行われたが、紺丹緑紫の彩色法から考えて本来紫色が施されていると思われる部分に対して、図3にあるように褐色系の彩色を施して復元再現されている。紫色の劣化・退色のため、元から褐色の彩色が施されていたかのように示されている程である。こうしたことを考えれば、紫色の彩色に際しての困難さが想像できる。

## 5. 紫色の変容

紫色が貴重な色としてあり続けた一方、材料の紫草は以前にも増して調達するのに容易ではなくなっていく。

奈良時代には国家規模での紫草栽培が行われており、絵画・彫刻・建築などの制作における材料調達のプロセスは明確であった。現場で彩色を行う工人は、所属する上位部署に材料の支給を要請することで、保存された国庫から必要な分量を調達できた。

しかし、平安以降、特に国家事業として画所や造寺院



図1 紫草 白い花を咲かせる。紅花のように花卉部分から成分を抽出するのではなく、紫色を呈する根の部分を用いて染色材料とする。

所などを抱えて作業をする形をとらないで絵画・彫刻・建築の彩色を行う場合、費用や手間といった材料調達の困難さが伴うことになる。先に言及した平等院鳳凰堂の装飾などはむしろ例外的で、藤原氏のような強力なパトロネージによればこそその彩色の絢爛さであり、紫色が多数施されるようなことがその他の一般的な事業における彩色でも同様であったわけではない。だが彩色に紫色が必要な以上、次第に紫の代用材料が求められ、「紫」ではない、代用の材料が用いられるようになる。

それは近世以降の絵画・彫刻・建築の装飾に用いられる紫色の絵の具においても見られる現象である。例えば、烟子・烟紫として正倉院文書でも表された、紫色の一つであると考えられる臙脂は、元禄六年（1693）の『本朝画史』に記される所では、「[俗云燕支極紫色也]本蘇芳木也」、とされ、蘇芳による紫色として伝えられている。調合色の浅紫の記述もあるが、そちらも「主胡粉加臙脂或加綿燕支」とある。ここで言う綿燕支は、カイガラム



図2 紺丹緑紫の配色法則  
小杉楢邨／横井時冬編『大日本美術図譜』第二卷明治33年（1900）より

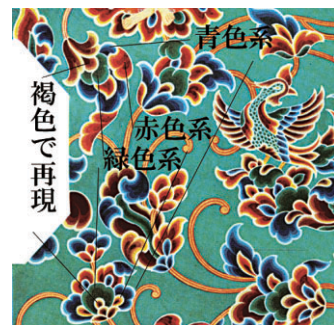


図3 紫色部分の褐色再現  
文化財保護委員会『鳳凰堂図譜』建築彩色篇1959年 の彩色復元図部分

シによる紫鑛である。

享保六年（1721）の『画筌』では、臙脂は「蛤粉に蘇芳を加て作る」とある。元文から寛保頃の間（1738-1742年頃か）に成立した『画法彩色法』では、「燕紫蘇芳木にて」と記載されている。これら画法書における指南では、紫色を呈する絵の具として、紫草を用いた紫色は記載されないが、紫土や蘇芳木による紫色については記載されている<sup>19)</sup>。紫色といえば臙脂、そして臙脂を蘇芳で代用する、という変容が生じていたのである。

上記のような絵画・彫刻・建築の彩色材料に留まらず、染色でも同様に代用の紫を用いていた。

しかも染色においては代用材料の活用だけでなく、紫色イメージの変容も生じている。既に述べたように、平安時代の十世紀正暦頃に、深紫の色を紫と五倍子・鉄漿を混ぜるなどの形で表すようになり、蘇芳に藤や柘榴を混ぜるなどするのが良いという記述が出てくる<sup>20)</sup>。これは、黒褐色から黒色が紫の代用色になって行く現象であり、黒が紫色と同等の位階色として成立したものである。「紫」が、「紫色ではない紫」へと変化したのである。

これに加え、蘇芳で紫色を染色するなど、代用の材料が多く活用された。紫草の代わりに蘇芳を用いる、にせむらさき、のような代用紫が染められるようになるのである。似せ紫については、慶安四年（1651）の『萬聞書秘傳』に、にせむらさきそめやうの事、として記載されている<sup>21)</sup>。

## 二、にせむらさきそめやうの事

すわう一斤つねに物をそめるごとくにせんじいだし。すきみやうばんを入つねのごとくあはせおけへ入。一日一夜人のあるかぬところに。をきさせて。うはずみをとりににてもそめ物をしたぞめをしてほし。そののちにしやうみのしるにたはこばを一合いれてよくあはせてそむるなり。……＜後略＞

## 三 同にせむらさきそめやうの事

すわうをいかにもこくせんじーはんそめをいかにもこくして。さていもがらのほしたるをたきて。二はむすわうにてあくにたれ。そのあくをまへのそめ物へむらなきやうにあけべし。いろいろすくはあくかけべし。ほんむらさきにまかひなしいつまでもかはらず。

こうした代用紫を考慮すると、古染色の紫は、近世では古代期程隆盛していなかったことも考えられる。元禄十年（1697）の宮崎安貞による『農業全書』には、紅花や茜、藍といった染料材料が草之類で項目を挙げられているのにも関わらず、紫草については項目がない<sup>22)</sup>。

『農業全書』は、後述する註23の『徳川実紀』内、有徳院殿御實紀附録卷十七にあるように、徳川吉宗による古染色復興の際にも参照されている。

もっとも、『農業全書』中に当時染料に用いる全ての植物が網羅されている訳ではない。ただ、茜と紅花と藍のような、染色における中心的な染料の原料について記されるのならば、古くから行われる染色として紫草によるものについての記載があるのが自然である。当該の項目がないということは、当時の染料材料として紫草が著名なものではなかったことが推測される。

明和九年（1772）の『諸色手染草』でも紫は蘇芳を用いるとされるなど、紫色の染色は紫草の代用材料が記される。その他、蘇芳を用いたり藍と臙脂を混ぜたりといった代用の紫色の染色方法について、一般の染色指南書等に記されることが多く、紫草のみによらずに紫色を出す蘇芳の代用紫や紅と藍を混ぜる二藍のような紫色の染め方が、一般に広く知れ渡るようになっていった。

享保十四年（1729）以降、徳川幕府八代将軍吉宗の時代に、失われていた延喜式等古式の染め方が再現されたが、紫草による染色もそのとき復活した染め方の一つであると記述内容から分かる<sup>23)</sup>。

古製の染色は。延喜式縫殿の部に。其法少し見ゆるといへども。今それをもてわきまへがたし。また往昔の布帛。染草もて。もののぐの飾に用ひしものままあれど。これも年をへて。色變りそこなはれて。其世のさまさだかにしりがたしとて。内藏式に載し染草の分量をたださせ給ひ。それにたがはず製し出すべしと仰出され。小納戸浦上弥五左衛門直方奉りにて後藤縫殿助に命じ。享保十四年より吹上の園中に染殿を開き。年々あまたそめ出しけるが。後にはみな習熟して。黄櫨染よりはじめ。紫。紅。二藍。葡萄。朽葉。山藍。縹。緑の類。みな古色に少しもたがふことなく染出しけり。其中に茜染は。むかし山城國山科の里にてもはら染けるが。いつしか茜草の製法を失ひて。此頃は蘇芳もて染しを茜染と名付。世にひさぐこととはぬなりぬ。然るにまことの茜染は。いかなる風雨霜露に逢といへども色かはらず。蘇芳にて染るも。打みたる處は劣らずといへども。年をふるか。風雨霜露にあへば。色かならず變ずといへり。さればむかしより武器には多く茜染を用ひしなり。これも染工等に命ぜられて。しばしばこころみられけれど御旨に應ぜず。其後貝原好古〔黒田右衛門佐綱政家人〕がしるしたる農業全書の中に。その染法をくはしくのせければ。＜中略＞かくて京よりも染工どもあまた召れて。種々のもの染けるが。後にはいと盛になりて。縫殿式の染色。半にす



ぎて染出しければ。この服色をあつめ帖とせられ。式内染鑑となづけて。後の證とせられしが。今なを奥の御文庫にあり。

上の記述には、紫ではなく茜染も蘇芳によって代用されていることが記されていることから、当時の蘇芳の代用材料としての有用さは言うまでもない。

他にも、天明元年（1781）の『増補華布便覧』では紫を藍と生臘脂（せうゑんじ）で作るものとしている<sup>24)</sup>。

これらの代用紫の染め方は、材料に紫草を用いる方法が当時の紫色の染色方法として必須ではなかったことを示している。吉宗の時代に古染色の復原が試みられつつも、紫色は、語源でもある紫草の色から離れて行き、代用の材や色でもって表されることが増えていったことを示す証左の一つでもある。

## 6. おわりに

以上のように、日本の紫色について古代から近世に至るまで概観した。日本の歴史上、彩色の材料が輸入されてより情報と知識が整理されて生産・使用の体制が整い、文化的にも高位の位階に伴う服色として明確に規定された八世紀頃に、紫は重要な色として確立した。その後、彩色の要素としてまた高位の服色として、紫は重要な色であり続けた。だが、材料の希少性や色の保持性から、本来の紫色を呈する材料であり、紫色の語源とも繋がる「紫草による紫」は減少して行く。紫色は位階に伴う服色では黒色に代わられ、彩色・染色においても蘇芳などの代用材が用いられるようになり、本来の紫草による紫色とは異なる色へと変わっていったのである。ただ、材料が変化して行きつつも、本来の語源的な紫色としての色名である「むらさき」が使い続けられたことによって、色名と材料との乖離や混同が生じたことが考えられる。

材料と名称との乖離は、本論中でも言及した臘脂や他の色でも生じる問題であるが、紫は特に顕著である。材料色名的な語源的名称が使い続けられる一方で、代用材が次々に用いられて行き、さらに近代以降には化学染料も登場するなど、材料の変化が大きい色であった。八世紀の古代に成立した色名はそのままに、様々な材料が増加して行く複雑な色として、紫は現代に続いている。

## 註

- 1) 日本古典文学大系 6 『万葉集』三、岩波書店1960、における番号に準拠する。
- 2) 松本直樹注釈『出雲国風土記注釈』新典社2007
- 3) 『大日本古文書』2、東京帝国大学1901、「豊後國正税帳」（正倉院文書）天平九年記事中に、国司巡行報告の記事があり、同文中「菴度蒔管紫草園」「菴度随府使檢校紫草園」という記

載が見られる。

- 4) 改訂増補國史大系『延喜式』（中）、吉川弘文館1979
- 5) 相馬隆「フェニキア紫雑考」『MUSEUM』227 1970. 2、pp. 26-34
- 6) 吉岡常雄『帝王紫探訪』、紫紅社1983
- 7) 前田雨城「発表記録・吉野ヶ里の貝紫と茜」『国立歴史民俗博物館研究報告』第62集、1995. 01、pp 62-76
- 8) 『二十四史 唐書』同文書局1903  
『二十四史 宋史』同文書局1903
- 9) 改訂増補國史大系『日本書紀』（後）、吉川弘文館1979
- 10) 改訂増補國史大系『日本書紀』（後）、吉川弘文館1979より  
庚午。勅。定明位已下進位已上之朝服色。淨位已上並著朱華〔朱華。此云波泥孺。〕。正位深紫。直位浅紫。勳位深緑。務位浅緑。追位深蒲萄。進位浅蒲萄。」「其朝服者。淨大弔已下、広弔已上黒紫。淨大參已下、広肆已上赤紫。正八級赤紫。直八級緋。勳八級深緑。務八級浅緑。追八級深縹。進八級浅縹の記述による。
- 11) 改訂増補國史大系『令義解』、吉川弘文館1981  
改訂増補國史大系『令集解』第三、吉川弘文館1981
- 12) 改訂増補國史大系『延喜式』中篇、吉川弘文館1979の縫殿寮によれば、深紫綾一疋（品目によっても異なるが長さとするれば二反であり22.6～25 m 程にあたる）であれば紫草三十斤、浅紫綾一疋であれば紫草五斤、といった紫草の分量を使用する基準が記されている。
- 13) 故実書画編纂部『故実叢書』1「歴世服飾考」、吉川弘文館1928  
近藤瓶城原著、近藤圭造増補『改定史籍集覧』27「桃華葉葉」、近藤活版所1901  
故実書画編纂部『故実叢書』24、吉川弘文館1928
- 14) 大河原典子『薬師寺吉祥天画像に関する研究：奈良時代の麻布画』2004. 09、博士学位論文、東京芸術大学（博美第132号）  
早川泰弘「材料 国宝吉祥天像の彩色材料調査」『検査技術』14（1）—147号、2009. 01、pp 45-50
- 15) 成瀬正和「正倉院宝物に用いられた無機顔料」『正倉院紀要』26号、2004. 03、pp 13-60
- 16) 近藤瓶城原著、近藤圭造増補『改定史籍集覧』23、近藤活版所1901内、「二中歴」造仏歴、絵像丹より
- 17) 秋山光和「日本上代絵画における紫色とその顔料」『美術研究』220、1962. 10、pp 175-196
- 18) 大蔵経学術用語研究会編『大正新脩大蔵経』図像篇12、大正新脩大蔵経刊行会1978（1934初版）
- 19) 狩野永納編、笠井昌昭他訳注『訳注本朝画史』、同朋舎出版1985、及び、坂崎担編『日本画論大系』1、名著普及会1980参照。
- 20) 前掲註13
- 21) 『萬聞書秘傳』（後藤捷一、山川隆平編『染料植物譜』京都書院1972、1912はくおう社刊の復刻版）中には、「にせむらさきそめやうの事」、として二つ記載される。何れも蘇芳を用いている点で共通している。
- 22) 益軒会編『益軒全集』8「農業全書」、国書刊行会 1973
- 23) 徳川吉宗による染色復元の試みについては、改訂増補國史大系『徳川実紀』第九篇、吉川弘文館1976内、有徳院殿御實紀附録卷十七、に見られる。
- 24) 前掲註21、『染料植物譜』より

〔付記〕

本論文は、日本色彩学会第四十回全国大会（2009年 5月）において発表した「日本古代の紫について——八九世紀における紫の彩色材料——」の内容に加筆・修正したものである。

また、本論文は日本学術振興会特別研究員奨励費（21・9877）の助成を受けた成果の一部である。